

ロタウイルス ワクチン

任意接種 年内にも開始

冬季に流行し、乳幼児が激しい嘔吐や水のような下痢に苦しむ「ロタウイルス胃腸炎」。予防を目的とするワクチンを七月、厚生労働省が承認し、年内にも任意接種が始まる見通しとなった。ただ他の予防接種と接種時期が重なるため、保護者は細かなスケジュール管理が必要だ。

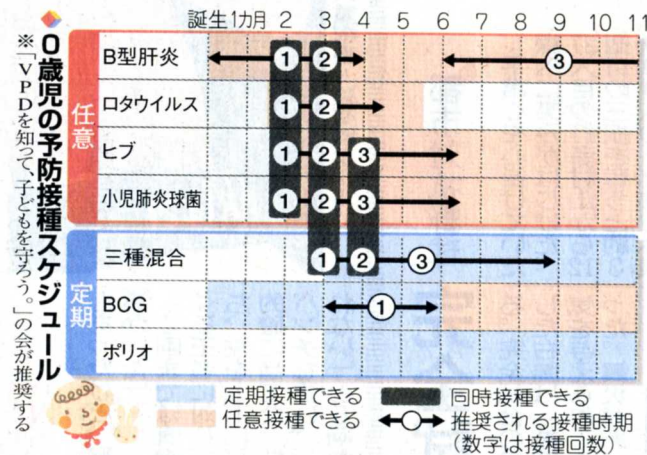
(佐橋大)

「入院の確率はインフルエンザより高い」。大同病院(名古屋市中区)の水野美穂子小児科部長は、ロタウイルスの怖さをこう表現する。

幼児は一週間近く、下痢や嘔吐が続くことが多い。ノロなど他のウイルス性胃腸炎より症状が重く、長引く。まれに脳症やけいれんなどの合併症が起きることも。日本では毎年約八十万人の乳幼児がロタウイルス胃腸炎で受診し、その約一割が入院。死亡例もある。

大半が五歳までに経験。インフルエンザに対するタミフルのような抗ウイルス薬はなく、治療はもっぱら、水分や電解質を補う対症療法。水分補給や汚物の処理に追われる親の負担も大きい。汚物とともに排出され

他の予防接種と重なる時期



日程の管理が重要に

るウイルスは感染力が強く、体外に出て数時間は長。は「衛生環境を整えても予防は困難。ワクチンでの予防は非常に意味がある」と指摘する。

世界保健機関(WHO)は、ロタウイルスワクチンの乳児への定期接種を推奨し、多くの国が実施している。

世界で使われているワクチンは二種類で、いずれも口からの接種。今回、日本で承認されたグラクソ・スミスクライン社(英国)の「ロタリックス」は百二十カ国以上で用いられ、液体ワクチンを四週間以上の間隔を空けて二回飲ませる。

国内の治験では、ロタウイルス胃腸炎を79%予防し、重症例を92%防ぐ効果が認められた。副作用は、一時的に光などに敏感になって不機嫌になりやすい「易刺激性」が7%、下痢が4%の子に出た。任意接種のため費用は自己負担。国内での販売価格は未定だが、海外では一回百ドルほどという。

費用に加えて保護者を悩ませそうなのが予防接種スケジュール。ロタワ

クチンを接種すると、生後六カ月までの予防接種がかなり多くなる。

ロタリックスは、生後六週以降に初回、二十四週までに二回目の接種を終えなければならない。この時期は、接種の努力義務があり、費用は原則公費負担の三種混合やBCGといった定期接種のある保護者のため、単独接種ができる計画表も個別に作っている。三鴨教授は「同時接種が嫌だから、受けるべき予防接種を避けたい」という人は、早めに医師に相談を」と呼び掛ける。

大同病院の水野小児科部長は「米国では四〜五種類を同時接種しており、危険との報告はない」と勧める一方、抵抗のある保護者のため、単独接種ができる計画表も個別に作っている。三鴨教授は「同時接種が嫌だから、受けるべき予防接種を避けたい」という人は、早めに医師に相談を」と呼び掛ける。



ロタウイルスワクチンと同じく、口からポリオワクチンを接種する乳児＝名古屋市内で

どもを守る。の会」は、同時接種を組み込んだ接種計画表を会のホームページに掲載しており、近く最新版に切り替える予定。

副代表で、おおた小児科(千葉市)院長の太田文夫医師は「ワクチンで防げる病気から子どもを守り、タイミングを逃さないためには同時接種が必要」と訴える。

同時接種で接種回数が減れば、子どもの体調不良で接種が遅れるリスクも減らせるからだ。特に、接種期間の短いロタのワクチンを接種するには、同時接種を積極的に活用すべきだとする。

ただ日本では、同時接種に抵抗を感じる人もいます。ヒブや小児肺炎球菌のワクチンを同時接種した乳幼児の死亡報告を受け三月、厚生省が両ワクチンの接種を一時的に中止したことも影響している。厚生省は「死亡と接種に明確な因果関係はない」として接種を再開したが、保護者には不信感が残る。